

中上健次とマックス・シュティルナー

——「十九歳の地図」における〈言語と〈労働〉——

埼玉大学教育学部国語専修 山本 良

1 初期小説群と「十九歳の地図」

中上健次の初期小説群といえ、『岬』(1973.10『文学界』)に始まる紀州サーガ以前のをさすとしてよいだろう。そこではいまだ、中上文学固有の「土地(路地)」は舞台として設定されていない。とはいえず、中上自身の来歴に関わる〈自殺した兄〉といった設定も頻繁に見られるのであり、『岬』以前と以後との区分は截然としたものではない。それを踏まえたうえで本稿は、その区分の境界線にある「十九歳の地図」(1973.6「文芸」)を、「土地(路地)」から切り離されてあるという観点からではなく、「言語」と〈労働〉の問題から考察する。なぜなら、「十九歳の地図」は、「岬」以前の初期小説群では〈自殺した兄〉の記憶が書き込まれていない数少ない小説の一つであり、なおかつ〈言語〉と〈労働〉の問題がその核に存在するという点で、「岬」以後との連続性も持つという特異な位置にあ

るからである。

それでは、「岬」以前との〈切断〉を可能にしたものはいったい何であったか。そのことに関して注目すべき発言が、柄谷行人との対談にある(「対談 路地の消失と逃亡」、一九九二・十二『国文学』)。

柄谷 その次に、節目みたいなものがあるとしたら、これは僕がよく知っている時期だけれど、結婚して羽田空港に働きに行ったでしょう。それまではフーテンみたいなものだから、そこが一つの転換だったろう。小説のほうも変わってきたと思うのです。初期のは、やっぱり大江健三郎の影響を受けていた。『十九歳の地図』は予備校生なんだけど、あれはむしろ羽田の労働者という感じだね。あそこから違う要素が出てきたと思う。どんな感じだった？ それまで働いたことなんてないんだらう。

中上 そう、それまで働いたことなかった。だいたい柄谷行人と中上健次というと、普通全然土壤の違うところから出てきていると思うかもしれないけれど、意識としてはほとんど変わらなくて、坊ちゃんですよ（笑）。実際に具体的に働いた、労働というのと出くわしたのは、やっぱり羽田に行つてからでしょうね。不思議な感じだったんですよ。スパッと切れるのです。その前のフーテン生活、全く何も働かないで、ただただ親から金をせびるだけせびる。そういう生活から、今度は親に一切何の援助も受けないで自分の労働だけで生活する。スパッと切れるのです。

柄谷 実際に切れたんじゃないかな。職場では君は……

中上 字書けなかった（笑）。

柄谷 代わりに他人が書いてくれたとか。

中上 そう、職場では字が書けないと思われていた。

「スパッと切れる」という切断の感覚は、この発言だけを切り取つて見れば、自堕落な生活を断ち切つたといった意味に理解できるが、直後に〈文字を書けない／書かない——実際に書けないはずはなく、むしろ自らそう見なされることを容認していたという意味で、「書かない」——〉に言及しているわけで、労働とエクリチュールのつながりは、看過できない。労働こそがエクリチュールの切断を可能にしたとも考えられる。

実際多くの論者によって、紀州サーガ第一作「岬」の冒頭部、そして第二作「枯木灘」の冒頭部、ともに「秋幸」と名付けられた主人公が土に向かつてつるはしをふるう場面が、あたかも

秋幸という存在そのものを象徴するかのごとくに引用されてきた。それほど「土方」（この用語を差別的な意味合いではなく、「岬」「枯木灘」からの引用として用いる）という労働形態が、秋幸に受肉化して表現されていると考えられたからである。

つるはしを打ちつけた。見事に根元まで入った。引き起す。土はふくれあがり、めくれる。つるはしを置いて、シャベルに代えた。腰を入れ、シャベルのかどに足をかけ、土をすくつた。外に、ほうり出す。汗が出た。まだ塩辛かった。いつも掘り方の時、塩辛い汗が出る間は、息をするにも力がいった。それが、水のようになつてしまえば、体は嘘のように楽になつた。掘り方に体が馴れ、力を入れ、抜く動きにびったり息が合っているのだった。特に掘り方は、好きだった。なによりも働いたという感じになつた。この単純さが好きだった。（「岬」）

今、働く。今、つるはしで土を掘る。シャベルですくう。つるはしが秋幸だったシャベルが秋幸だった。めくれあがつた土、地中に埋もれたために濡れたように黒い石、葉を風に震わせる草、その山に何年、何百年生えているのか判別つかないほど空にのびて枝を張つた杉の大木、それらすべてが秋幸だった。秋幸は土方をしながら、その風景に染めあげられるのが好きだった。（「枯木灘」）

やや露骨ともいふべき象徴性が、この描写にあることは否定

できない。(1) 初期小説の最後期に属する「十九歳の地図」には、このような描写はない。だが、仮に「十九歳の地図」が「切断」の契機であるといえるならば、そこには「岬」に見られる肉体労働の象徴性とは別の〈労働〉の形態があるのではないか。そしてそれは、テクストに点在するマックス・シュティルナーやマルクスとの関わりから再検討すべきではないか。

新聞販売所に住み込みで働く予備校生を描いた「十九歳の地図」について、柄谷行人は、予備校生というより「羽田の労働者という感じ」と発言していた（前出「対談 路地の消失と流亡」）。

ぼくは自転車を使わずに、走って配っていた。ぼくは荒い息を吐きながら走っているぼく自身が好きで、左脇にかかえたインキのおいとあつたかみのある新聞の束から手ばやく一部抜きとり、玄関があいているときはそのまま紙ヒョーキをとばすぐあいにほうりこみ、郵便受けがあるときはそれを軽く四つに折ってつつこんだ。玄関がとぎさされているときは、戸のわずかな隙間に、新聞の背のほうからさしこみ、その家の住人が鍵をあけ戸をあけた途端ひっかかっていた新聞紙がいま送りとどけられたと音をたてておちるように工夫した。（全集1、三七八頁）

あえて自転車を使わず、走っている「ぼく自身が好き」とまて言い切るその姿は、他の初期小説には見られないものである。家屋の造りや状態に応じて駆使される新聞配達技術は、身体

化されているといつてよい水準に達しており、つるはしと一体化した「岬」の秋幸を思わせる。しかし、これは一瞬のみの例外的な感慨であって、テクスト全体は「ぼく」の自己嫌悪や自己否定、その反転としての他者否定に覆われている。

ぼくは十九歳だった。ぼくは予備校生だった。他の予備校生のように仕事をしなせぐ必要もなく、一日中自分の部の部屋にいて自分だけの自由な時間があればどんなにいいだろうか。絶望だ、ぜつぼうだ、希望など、この生活の中にはひとかけらもない、ぼくは紺野の笑いをまねしてグスッと鼻に抜ける声をたてた。ぼくは壁にまるめたふとんに背をもたせかけて坐り、手を思いっきり上にあげて欠伸をした。腹がくちくなり眼がとろんとなるほどぼくを十分に満足させるものはなにひとつない。快樂の時間だってそうだ。いつもだれかにみられ嘲笑われているように感じるとし、不意に扉がひらかれて人がはいりこんできそうな感じになる。（全集1、三七五頁）

「ぼく」は自流をする自分を「いつもだれかにみられ嘲笑われているように感じ」ている。だからこそ、世界に立ち向かう手段として地図の作成に没頭し、時にいたずら電話を通して他者に憎悪をあびせかけるのである。

「岬」「枯木灘」に描かれた〈労働〉との連続性を垣間見せながら、「十九歳の地図」の〈労働〉は「ぼく」を充足させる内実を持ちえない。だからこそ、その欠如を埋めるかのようにし

て、記号と言葉とが執拗に求められる。ならば、〈労働〉について検討する前に、それと相即的な関係にある〈言語〉について考察しておく必要があるだろう。

2 「十九歳の地図」における〈言語〉の問題

「十九歳の地図」の「ぼく」が示す攻撃性は、初期小説に典型的な若者像の属性であるが、このような人物造形が大江健三郎の影響を受けていることは否定できない。たとえば柴田勝二は、「日本語について」と大江の「見るまえに跳べ」との、また、「一番はじめの出来事」と「飼育」との類縁性を指摘している。^②「十九歳の地図」に関していえば、「セヴンティーン」(一九六一・一「文学界」との関連が最も重要であろう。「セヴンティーン」は、改正日米安保条約調印に反対する一九六〇年六月の国会デモと、機動隊との衝突で東京大学学生が死亡した歴史的事実とを背景に、浅沼稻次郎日本社会党委員長暗殺事件の実行犯少年をモデルとする十七歳少年が、行動派右翼団体に入党することで自意識の悩みから解放される様を描いている。

十代の少年の自意識の空転と、過剰なまでの対他者的な攻撃性とは、両者の明らかな共通点である。「十九歳の地図」の「ぼく」は、周囲の人間に対する怨恨や呪詛をまき散らしながら新聞を配達し、地図に×印を書き込んだり、いたずら電話をかけることで、「なにもかになってやろう」とする。この「攻撃的な志向」について柴田が、六〇年代後半の民主主義運動の退潮、旧左翼の被害者意識から全共闘等の新左翼の加害者意識への転換を踏

まえ、大江と中上の差異として注視し、とりわけ中上の初期小説に存在する「肉体的な暴力」「意識と行動の荒々しさ」を指摘しているのは的を射ている(前掲同書)。

しかしながら、「セヴンティーン」の「少年」が右翼というステータス、象徴としての制服を身に付けることでその攻撃性を安定させ、権威としてのファルスを獲得していったのに対し、「ぼく」は、高揚と落胆との間を揺れ動きつつ、ついに「なにもかになる」ことはなかったのである。「十九歳の地図」では、

ぼくは椅子から立ちあがり、俳優のように背をまるめ、上目づかいに窓の外をみて、「おれは右翼だ」と言ってみた。しかしどこか嘘のような気がした。「おれはおまえを生かしちゃおかない、おまえなんぞ死んでしまえ、おまえはきたならしい」ぼくは声に出して言ってみた。(全集1、三九四頁)

と、抽象的な誰でもない相手に向かって「おまえを生かしちゃおかない」とうそぶくだけであり、終始一貫して「嘘のような気が」付いて回る。

あらたに三重の×印の家を三つ、二重×を四つぼくはつくった。刑の執行をおえた家には斜線をひいて区別した。物理の法則にのっとってぼくの地図は書きくわえられ、書きなおされ消された。ぼくは広大なとつともなく獯猛でしかもやさしい精神そのものとして物理のノートにむかい

あった。ぼくは完全な精神、ぼくはつくりあげて破壊する者、ぼくは神だった。世界はぼくの手の中にあった。ぼく自身ですらぼくの中にあった。(全集1、四〇二頁)

「ぼく」はただ観念の中でのみ、記号の王国を構築して、「広大なとてつもなく瘁猛でしかもやさしい精神そのもの」すなわち「完全な精神」「つくりあげて破壊する者」「神」として、全能感にひたるのである。「ぼく」が繰り返す爆破予告のいたずら電話も、地図という記号の王国と同質の、自己完結的な閉塞した世界を構築してしまう。

「爆破すると言うのですか?」「いや、そんなこと知らない」「爆弾をしかけたと言うのですか?」「さあ、どうかな?」「いま車庫に入りますよ、冗談でしょう?」

「ぼかやろう!」冗談かどうかみている、ふつとぼしてやるからな、血だらけにしてやるからな、なにかもめちやくちやにしてやるからな」ぼくは受話器を放りなげるようにしておいた。玄海号は今日の午後八時に東京駅を発車する。午前四時頃に〇駅につき、五時頃にK市につき、六時すぎにSにつく。ぼくは顔にあたっている光のほうにむかってあかんべえをひとつやり、声に出して笑った。ぼかやろう、とんま、うすらばか、はくち。(全集1、三九四頁)

紙の上にはしか存在しない地図の世界とは異なり、電話でやり取りされる言葉は、現実の相手に向けられたものであり、少な

くとも対他的な志向性をもっているといえなくはない。しかし、引用の直後で、高揚するはずの気分とは裏腹に、「体の中のかなにかが砕けて血液のようにどろどろしたものが外に流れだす気が」してしまう。末尾でも繰り返されるこの溶解の感覚は、いったい何か。

地図に×を書き込む「ぼく」は、自らを神に擬しながらも、「とさどさ英語解釈をこころみたり単純な代数の計算をやっているぼく自身が滑稽に思えるときがあり、うじ虫野郎と自分のことを悪罵するのだった。」と、全能感に浸ることとは裏腹に、分裂した自己を「うじ虫」とも感じている。

このぼくに自分だけのおいのしみこんだ草の葉や茎や薬屑の巢のようなものはない。ない、ない、なんにもない。金もないし、立派な精神もない。あるのはたったひとつのぬめぬめした精液を放出するこの性器だけだ。(全集1、三七五頁)

「ない、ない、なんにもない。」というように、「ぼく」には当初から欠如が刻印されている。自己完結的で閉塞した記号と言葉の世界は、この欠如を埋めようとして構築されている。たとえば、「ぼかやろう、とんま、うすらばか、はくち。」というように、思いつく限りの悪罵として。しかし、その世界は繰り返される溶解の感覚とともに、崩壊する。「十九歳の地図」は、「ぼく」の世界が失調や崩壊へ突き進む様を描いた小説なのである。

ここで問題になるのが、中上が以前から、同じ十九歳の若者

で殺人者となつた永山則夫へのこだわりを書いていたことである。あふれだす記号と言葉の世界で自己の同一性を安定的に定位置しようとする若者の姿を描く「十九歳の地図」とは対照的な、ついに「言葉というものを持ちえなかつた」青年として、永山をとらえている。

永山にとつてもともと内部（言葉）というものはなかつた。では、なぜ永山則夫に内部（言葉）はなかつたか？永山則夫に対峙する人間として、李珍宇という他者をもちだすのではなく、ぼく自身を引きあいに出してみよう。そうすれば、彼はいかなる意味においても外部の人間であり、なぜ内部がなく、そしていつ内部をとりもどすこと（自己同一化）ができたのか？ わかるような気がする。

ぼくはなぜ書くのか？（「犯罪者永山則夫からの報告」、一九六九・八「文芸首都」、全集14、二二四頁）

永山について語っているようであり、ここで中上は永山の意識を借りながら、「なぜ書くのか？」と、永山＝中上として、自問自答する。

お母さん、俺はこんな街のこんなアパートにひそんでいて、意味がわからないのに悲しい。俺の手紙をみて、まず泣くんだろう？ あんたは泣くことしか知らないように、俺の手紙をみて泣くんだろう？

あんたが泣くのは雪のせいだ！（略）

俺は自然からはじきだされ、そして自然の力でピストルの引き金をひかされたようなものだ。自然とは、あんたなんだ。あんたから遠く離れたから、男である俺は人を殴りつづけるということになった。俺になにがあるか？（全集14、二二五頁）

ここでの「俺」は永山則夫である。新聞に掲載された永山の母に宛てた書簡を読み、中上が永山の意識そのものになり、「自然」＝「あんた」＝「母」を狂おしく求めつつ、自らをそれからつきはなされた存在として語っているのである。ラカン理論のアナロジーでいえば、人がそこからつきはなされたものとしての「自然」＝「母」こそ、《想像界》であるう。⁽³⁾

この「ぼく」の、自己完結的な記号と言葉の世界が決定的に失調するのは、「かさぶただらけのマリアさま」と呼ばれる女性との電話を通した最後のやりとりによってである。

「だから、おれは、おまえみたいなやつがこの世にいることが気持わるくって耐えられない、腹だたしくってしようがない、嘘をつきやがつて」ぼくが言葉を吐きちらすように言うと、不意に受話器のむこう側で風がふきはじめたような音がひびき、糸のような声がし、「死ねないのよお」と言った。「死ねないのよお、ずうつとずうつとまえから死ねないのよお、ああ、ゆるしてほしかったのよお、なんども死んだあけど、だけど生きてるのよお」女はうめくように言いつづけた。（全集1、四一一頁）

いたずら電話をかけられても平静を保っていた女性が、突如として思いもかけなかった姿に変貌する。女性は明らかに〈過去〉に生きている。〈過去〉から執拗に回帰する声に囚われてゐる。〈象徴界〉からこぼれ落ちた世界、いわばタナトスや〈狂気〉の世界、ラカンがそれを〈現実界〉と呼んだ。ここで「ぼく」が触れたものこそ女性の〈狂気〉である。それは常に〈過去〉と関わり、回帰するものである。

〔労働〕の代補として求められたはずの記号と言葉の世界は、他者の言葉によって決定的に失調した。それでは、〈労働〉とはどのような位置づけにあったのか。次節より、あらためてシュティルナーから考察したい。

3 中上における「シュティルナー・ショック」

中上は自身の過去を振り返るとき、しばしば、マックス・シュティルナーに接した記憶を語る。

中上 ……柄谷行人は勉強家だったよね。たとえば『唯一者とその所有』とか、おまえ読めよとかさ。ずっと俺読んでね。(略)

柄谷 ……マックスだって、俺の方が分かっているといばつてるんだからね。そういう勉強家の側面がありました。(略)

中上 ……たとえば、鳥のように獣のように、つてあるでしょう。エッセイとかなんとかいうんじゃないか、その言葉ね。つまり漁師のように漁をし、狩人のように狩りをするつてい

うやつ。『ドイツ・イデオロギー』のなかにあるんです。俺、本当にそうしたいと思ったのよ。そう生きたいと思ったんだよ。思いながら、働いていたよ。

柄谷 『枯木灘』は、やっぱり君の『ドイツ・イデオロギー』なんだろう。(対談 文学の現在を問う「1978」『現代思想』)
同様のことは、およそ十五年後にも再び確認されている。

中上 サンフランシスコで会ったときも、ニューヨークで会ったときも、昔それこそ僕が二十歳であなたは二十五歳で、会ったときと同じような話をして。(略)

柄谷 シュティルナーの話とか。でもそれは少しも古くないよね。

中上 古くないね。(前出「対談 路地の消失と逃亡」)

これほど鮮明に記憶されているシュティルナーの『唯一者とその所有』、そしてシュティルナーへの批判を含むマックス・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』は、中上／柄谷にとつて何を意味するののか。

なにも変りやあししない。ぼくは不快だった。この唯一者のぼくがどうあがいたって、なにをやったって、新聞配達
の少年という社会的身分であり、それによってこのぼくが
決定されていることが、たまらなかった。(二十九歳の地図、
全集1、三七七頁)

この「唯一者のぼく」がシュテイルナーからの引用であるならば、「新聞配達少年」という社会的身分」によって「このぼくが決定されている」はマルクスからの引用として読むことができる。さらにいえば、先に引用した「犯罪者永山則夫からの報告」にもすでに「唯一者中上健次と無教の中上健次」「唯一者であるぼく」といった表現があり、『唯一者とその所有』とか「ずっと俺読んで」いたのが一九六九年以前に遡れることがわかる。ならば、この問題は、一九七四年六月発表の「十九歳の地図」まで、少なくとも四年間以上続いていたことになる。シュテイルナーとマルクスとの対立、あるいはヘーゲル左派における「シュテイルナー・ショック」⁽⁴⁾に比肩しうる問題が、中上において、存外根深く存在していたといふべきだろう。中上が初のエッセイ集に『鳥のように獣のように』という題名を付して刊行したのが一九七六年六月、「岬」で芥川賞を受賞した数か月後である。「枯木灘」は同年十月より翌三月まで「文芸」に連載された。「枯木灘」が『ドイツ・イデオロギー』であるという柄谷の発言は、比喻以上の意味をもつ。「枯木灘」が『ドイツ・イデオロギー』であるならば、「十九歳の地図」が『唯一者とその所有』になぞらえ得るのだから。

柄谷の側からその事情をうかがい知ろうとするならば、『マルクスその可能性の中心』（初出1974.3.8「群像」、初刊一九七八・七）を参照する必要がある。雑誌連載された一九七四年は、中上が「蝸牛」（三月、「文芸」）「鳩どもの家」（九月、「すばる」）「修験」（九月、「文芸」）によって、初期小説からの転回を遂げた年である。両者の同時性は、単なる交友関係

を超えている。当時柄谷は、『ドイツ・イデオロギー』について次のように述べていた。

『ドイツ・イデオロギー』において、マルクスは「外側」からドイツ哲学をみた。しかし、この「外側」はたんにドイツの外側ではありえない。（略）たとえば、マルクスは、「哲学者たちにわかりやすいことばでいえば疎外とは……」と書いている。哲学者たちとはむしろドイツの哲学者たちのことだ。つまり、マルクスはもはや「疎外」という言葉が通用しない場所でものを考え見ている。

マルクスの文体がいちじるしく変わるのには、『ドイツ・イデオロギー』以後である。そして、思想家が変わるとは文体が変わることにはほかならない。理論的内容が変わっても文体が変わらなければ、彼はすこしも変わっていない。ヘーゲルから切れるとは、さしあたりヘーゲルのターミノロジーから切れることである。

中上の〈切断〉は、ここで柄谷が言う「ヘーゲルのターミノロジーから切れること」と、重なり合う。そしてそれは、労働疎外論からの転回というマルクスの根幹においてあらわれている。

初期マルクスから「フオイエルバッハに関するテーゼ」「ドイツ・イデオロギー」を執筆した一八四五年頃を境に遂げられた転回——疎外論から物象化論への転回——は、L・アルチュセールや廣松渉がマルクスの認識論的切断として強調したところであるが、若干の違いを含みつつ、柄谷もその立場を同じく

している。⁽⁵⁾

当のマルクスは、〈労働〉について次のように書いている。⁽⁶⁾

分業はただちにつきのことの最初の実例をわれわれに提供する。すなわち、人間が自然成長的な社会のうちに存在するかぎり、したがって特殊利益と共通利害との分裂が存在するかぎり、人間自身の行為はかれにとって一つのよそよそしい対立的な力となり、そしてかれがこれを支配するのではなく、これがかれを抑圧するということの実例である。すなわち労働が分配されはじめるやいなや、各人は一定の専属の活動範囲をもち、これはかれにおしつけられて、かれはこれからぬげだすことができない。『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫古在由重訳旧版四三頁、同廣松版六六頁

すなわち、マルクスに従えば、疎外された〈労働〉をプロレタリアの自覚云々で取り戻すことは不可能である。

社会的な力は、すなわち分業のために制約された協働（種々な個人の）によって発生するところの倍加された生産力であるため、これら個人にはかれら自身の結合された力としてはあらわれずに、かれらのそとにたつよそよそしい強力としてあらわれる。そしてこれについてはかれらは、どこからきてどこへゆくのかを知らない。したがって、もはやかれらはこれを支配することができない。かえってこ

れはいまや独自の、人間の意欲や動向から独立な、いなかの意欲と行動をまず支配するような、一序列の位相と発展段階をたどってゆく。哲学者たちにわかりやすいならば、この『疎外』(Entfremdung) はもちろんただ二つの実践的な前提のもとでのみ廃棄されることができ。(旧版四五頁、廣松版六九頁)

「疎外」という用語が使われてはいるもののテキスト全体での使用はわずかで、「分業」によって、人間の〈労働〉が外化されたその力は、労働者個々人ではなく関係（＝協働）の相で、〈物象化〉された力として把握されている。廣松版は、「かれら自身の結合された力」を「彼ら自身の連合された力」と訳し、シュテイルナーの「連合」との関連をうかがわせると注記している。シュテイルナーは労働について経済的に精緻な分析を行っているわけではなく、その「連合」において「一体いかなる生産・流通が『自己性』や『所有』を支えるのかを問うても答は得られない」。⁽⁷⁾ その労働観の欠陥は、『唯一者とその所有』全体の趣旨から外れかねないものと指摘されている。⁽⁸⁾ 『ドイツ・イデオロギー』の批判は、当然その点にも及んでいると考えられる。「枯木灘」が「ドイツ・イデオロギー」だとする柄谷の発言を中上も共有しているならば、「マルクスが『ドイツ・イデオロギー』において、シュテイルナーを嘲笑的に批判したことはよく知られている」⁽⁹⁾ わけであるから、中上の小説においても、シュテイルナーの労働観が「嘲笑的に」乗り越えられたと見なされ得る。だがしかし、ことはそう単純ではない。

4 労働と唯一性

柄谷は、「マルクスその可能性の中心」では、シュテイルナーに関してほとんど何も記していないが、『トランス・クリティーク』に到り、シュテイルナーの「連合」をブルードンのアソシエーションと矛盾しないと捉え、シュテイルナーは『エゴイストたちのアソシエーション』として社会主義を構想した⁽¹⁰⁾と、マルクスのアソシエーションズムとの連続性において評価している。前者の時点で『トランス・クリティーク』と同じ認識を得ていたとはいえないにせよ、中上／柄谷のシュテイルナーに対するこだわりからして、決して「嘲笑的に」退けられたとは思われぬ。

さしあたり（労働）に関わる観点から、シュテイルナーの思想を概観していこう。

シュテイルナーは、まずフォイエルバッハのキリスト教批判——疎外論——を批判する。フォイエルバッハは、人間の本質が神あるいは神の理念の受肉化／外化であるのではなく、神こそ人間の類の本質が疎外されたものであり、人間はそれを取り戻さなければならぬと説く。この批判に従えば、主語と述語は転倒し、人間は神に代わって至高の存在となる。だがしかし、それは生身の現実存在としての人間ではなく、類の本質としての（人間なるもの）でしかなく、結局、生身の現実存在としての（この私）は閑却されたままなのである。個々人は本来（この私）として「唯一者」であり、「所有」とは自己が自己であ

るということ、端的な自己性の謂いに他ならない。

シュテイルナーは同様にして、政治的自由主義・社会的自由主義・人間的自由主義等、各種自由主義をいずれも退ける。ブルジョア自由主義である「政治的自由主義」では、市民が厚く保護される一方、プロレタリアは資本家の支配下に置かれる他なく、人々は国家に媒介されることによってしか（人間なるもの）たりえない。社会主義や共産主義である「社会的自由主義」において人々は平等になるが、そこでは「所有」は「社会に属するもの」となり、それは「われわれすべてはルンペンとなるべし」というのに等しい。共産主義は「われわれのすべてが労働者であるということにおいて、われわれは平等であるのだ、と」いう。「労働者は、彼における本質的なものが『労働者』たることであるとの意識に達し、エゴイズムからは遠くはなれて、ちやうど市民が競争国家に帰依したのと同様にして、労働者社会の至上権に屈服する」（片岡啓治訳、⁽¹¹⁾以下頁数のみ記す、上巻164）のである。

バウアー流の批判主義である「人間的自由主義」は、共産主義的な「労働」を利己的な動機に発するものとして批判する。「人間を尊くするのは、ただ人間的な、自己意識的な労働、『エゴイスト的』意図ではなく、人間を目標とする労働、人間の自己開示であるような労働だけ」（176）であるとして、「人間を裨益し、人類の幸福を目ざし、歴史的なつまり人間的な発展に仕えるような、要するに一つの人道的な労働、であらねばならぬ」（175）という。

シュテイルナーによれば、人はすでに「唯一者」でありその「所

有」とは端的に自己性の謂いであり、キリスト者であることや、国民であること、労働者であることなどはかかわりがない。それはただ、「特殊的」ということであって、「唯一的」ということではない。

ところが、『唯一者とその所有』には、〈労働〉を「唯一者」の条件として定位しているのではないかと疑われるような記述が、わずかながらある。シュティルナーは、人間的自由主義は〈労働〉の質を人間なるものの基準に据えているという。

では彼がただ彼自身のためだけに働いたのであるとするならば、なぜ彼の行為は人間的であるのに、他の人びとのそれは非人間的すなわちエゴイスト的であるのか。(略) シラーの詩にわれわれはシラーのすべてをみる。が、これに対し、凡百のストーヴにわれわれは、ストーヴ作りを見るにしても、「人間」を見ることはないのだ。

とはいえ、これは、ある仕事に君らが私をあたくざり完全に、別の仕事にはただ私の腕前だけを見る、ということ以上の何を意味するか。行為の表現するところのものは、ふたたび自我ではないか。そして、ある作品において、世界に自己を現わし、自己をかたどり形象化するのは、その仕事の背後にかくれることよりも、よりエゴイスト的ではないのか。なるほど、君はいう、君は人間を開示するのだ、と。だがしかし、君の開示するところのその人間とは、君ではないか。君は、ただ君を開示するだけなのだ。(178)

人間的自由主義者は、ストーヴ作りはエゴイスト的な私欲に発するエゴイスト的な労働だが、シラーの詩はちがう、という。それに対して、シュティルナーは反論する。自己を十全に開示するシラーの詩は、よりエゴイスト的ではないのか。人間的自由主義者は反論する。シラーは「より尊厳にしてより高く偉大なる人間」「いかなる他者よりも以上に人間であるような一人の人間を、開示するのだ」と。シュティルナーはさらにいう、では理論家である「君の偉大とはどこにおいて成りたつか」、それは「君が人間であるからではなく、『唯一』者であることによつてなのだ」。「人は、人間より以上ではありえない、と信じている。だがむしろ、人はそれより以下ではありえないのだ」。「私はこたえよう。ただ、君らが唯一的であるときのみ、君らは、君らが在るところのものとして、他と交通しうるのだ、と」。

シュティルナー自身はここで、「唯一者」であるための条件について考察しているわけではないだろう。エゴイスト的なあり方を一切排除し、〈人間なるもの〉を至上の価値とする人間的自由主義を退けているだけである。だが、ストーヴ作りには「人間」を見ず、シラーの詩に「人間」を見るということ自体を、シュティルナーは追認してしまう。なるほどストーヴ作りには「腕前」しか見出せず、シラーの詩に「人間」が「開示」されているのはたしかだが、むしろシラーの方がエゴイストである、と。つまり、人間的自由主義とシュティルナーの違いはエゴイストの定義に存しており、両者ともストーヴ作りとシラーの詩の差異を、認めているのである。これはたしかに、唯一性をめぐる

論理と矛盾しかねない物言いであり、次の引用部もそれとほぼ同様である。

たゆみない営みも、われわれに息つくひまもゆるさず、心静かな享受も許してくれはしない。われわれは、自らの所持を楽しむことさえないのだ。

とはいえ、労働の組織が取って代われるのは、たとえば、屠殺、農耕等々といった、他者がわれわれのためにしてくれることができるような種類の労働だけであって、その余の労働は、依然エゴイスト的でありつづける。というのはつまり、たとえば誰も君に代わって君の楽曲を仕上げることはできず、君の絵の構想を実現することもできないからだ。ラファエロの仕事は、誰も取ってかわることができない。この仕事は、唯一者の仕事であり、ただこの唯一者のみがそれを完成する能力をもつ。これにたいしては、前者の仕事は、「人間的」と名付けるのがふさわしかろう。というのも、この仕事「労働」では自己固有的なるものは、わずかな意味しかもたず、「どの人間」もがかなりのていどまでそれに訓練されうるからだ。(下巻、171)

共産主義のもとで人間的労働を管理することは可能でも、ラファエロの仕事は、シラーの詩と同じく、「唯一」の代替不能な〈労働〉だというのである。(12)

私は、他者に対して何らか特殊なものをもとうとも思

わないし、またそうであろうとも思わない。私は、他者に対するいかなる特権も求めはしない。(略)

人は、自分を、たとえばユダヤ人とかキリスト者というように、「何か特殊なもの」と見なしてはならない。だから、私は自分を何か特殊なものともみなすのではなく、唯一的なものとみなすのだ。私は、たしかに他者と類似性をもちもするだろう。しかしそれは、単に比較あるいは反省とみなされるにすぎず、事実的には私は比較不能であり、唯一的であるのだ。私の肉体は彼らの肉体ではなく、私の精神は彼らの精神ではないのだ。たとえ、君らが「肉体、精神」といった普遍性のもとに総括しようとも、それは君らの思想なのであって、そんなものは、私の肉体、私の精神とは何のかかわりもありえず、少なくとも私のものに対し「召集」をかけるわけにはいかないのだ。(186)

「私」や「君ら」がすでに「唯一者」であつたからといって、これは論件先取ではない。なぜなら人は、特殊性を求めずにはいられず、唯一者であることを受け容れようとはしないからである。シュティルナーの主張はこの点にあり、だからこそ〈労働〉の質などが問題になるうはずはないのである。しかし、芸術という〈労働〉の唯一性に関する限り、シュティルナーは揺らぎを示してしまっている。

一方、「十九歳の地図」では、「ぼく」の〈労働〉は、それなりに充実感をもたらすものとして表現されていた。しかし、疎外された〈労働〉を取り戻すなどということは到底不可能であ

るという絶望的な認識が漂っているのもたしかである。先に引用したように、「この唯一者のぼくがどうあがいたって、なにをやったって、新聞配達少年という社会的身分であり、それによってこのぼくが決定されていることが、たまたまなかった。」であり、まさしく「労働が分配されはじめるやいなや、各人は一定の専属の活動範囲をもち、これはかれにおしつけられて、かれはこれからぬけだすことができない」『ド・イデオ』。「社会的身分」によって「このぼくが決定されている」ということは、すでに「このぼく」という唯一性は失われているという認識である。それでも唯一の「このぼく」であろうとすれば、「ぼく」にはどのようなあがきが残されているのか。十九歳の少年の語りとして当然だが、それは、「分業」それ自体を揚棄するというような『ドイツ・イデオロギー』の水準で表現されるはずもない。その代わりに、唯一者は、「犬の精神」という言葉で表現されるのである。

ぼくはたった一人で自分の吐く息の音をききながら走りつづけていた。朝、この街を、非常に邪悪なものがかけまわる。この街にすむ善人はそんなことも知らず、骨も肉もとろけるほど甘い眠りをむさぼっている。犬が坂をのぼってキャバレーのウエイトレス募集のビラをべたべたはった電柱の脇で、ポリバケツをひっくり返し、食いものをあさっていた。茶色の犬はぼくが近づくと歯を剥きだしにしてうなり逃げだそうとしなかった。ぼくは走るのをやめ、四つんばいになり、ぐわあと喉の奥でしぼりあげた威嚇の声

をあげた。犬は尻尾を後脚の間に入れ、背後から近づこうとしたぼくに顔をねじって唸りつづけて、ちよつとでも自分に触れば噛みちぎってやるといふかまえた。ぼくは立ちあがった。ぼくは犬ではなく、人間の姿に戻り、それでもまだ犬のように四つんばいになって犬の精神と対峙していた気がしていた。犬の精神、それはまともに相手してもよい充分な資格をもっている気がした。この街を、犬の精神がかけめぐる。(二十九歳の地図、全集1、三七九頁)

なぜ「ぼく」は「犬のように四つんばいにな」るのか。そして、なぜ「犬の精神」だけが「まともに相手にしてもよい充分な資格をもっている気がする」のか。それは、犬が、シュティルナー的な意味での、国家にも民族にも階級(労働者階級のよいうな)にも回収されない、「唯一者」であるからに他ならない。しかしながら、「犬の精神」とは唯一者としての「ぼく」のことであり、新聞配達という(労働)を通してそれが現前するのだと、単純に結論付けるわけにはいかない。引用の最後の一文「この街を、犬の精神がかけめぐる。」において、「かけめぐる」のははたして「ぼく」なのか、「ぼく」が対峙する犬なのか。直前に「ぼく」はすでに犬の姿ではなく「立ちあがっ」ており、「対峙していた気がしていた」り、「充分な資格をもっている気がした」りしているが、実はそれはあくまでも「気がする」という気分的なあり様である。たしかに、「右翼に涙はいらぬ。この街をかけめぐる犬の精神に、感傷はいらぬ。」とうそぶく場面もあるのだが(四〇一頁)、しかし、それもまた、自己

同定とはおよそかけ離れた空々しさを伴う気分過ぎない。

おれは犬だ、隙あらばおまえたちの弱い脇腹をくいやぶつてやろうと思っっているものだ。それは予備校のテキストののっぺりしただれかの詩の一節だったかもしれないが、ぼくはそれがいまのぼくの感情にびつたりのような気がしてうれしくなった。(全集1、三八八頁)

「おれは犬だ」という思いは、「歌のような文句」であり「だれかの詩の一節だったかもしれない」ないが、「いまのぼくの感情にびつたりのような気が」する。むしろここには、地図を操りいたずら電話で言葉を弄ぶことの徹底的な空虚さを読み取ることのできるのであって、それは「犬の精神」に同化しようとすることと何ら変わらないのである。しかし他方で、「労働」を通して唯一者たろうとすることを、単なる幻想として退けられない思いが、中上のテキストに刻まれているのたましかなのである。

唯一者中上健次と無数の中上健次という具合に考えてみ、それを書くという行為の現場においてみる。ぼくはものを書く。そしてそれを活字にする。読者という他人(もちろん書き手である中上健次も活字に対しては他人になるが、ここではそれをのぞく)が読む。おまえの考えていることはこうで、つまりなんのことはない、世間にざらにあることじゃないか、と言われる。そうなんだ、実際にぼく

らは同じか、似たりよつたりを考えなりをしかいだいていない。もつと深く考えなければ、考えていることを活字にした時、活字そのものによる手痛い反乱を食うことになるぞと好意的にからかわれる。だが、しかし、唯一者であるぼくは、俺の傷は俺自身だけのものであり、無数の中上健次なんぞに、なんのことはない、などと言われてたまるか、と思ってしまう。つまり、言葉を使って書くということのなかには、わかってくれ、みんなわかかって素裸の俺を、いや内臓の奥の奥、性の奥の奥なる俺をわかかって抱きしめてくれ、俺は君(他者)と完全に同化したい、という願望があり、そしてその裏には他者との癒着を激しく拒絶する、俺は俺だしどこまでいっても俺だ、というものがある。それは完全に「私」の領域に属する世界であり、それが書くという行為の永続化の要因でもあるのだ。(「犯罪者永山則夫からの報告」、全集14、一三二二頁)

他者との同一化を狂おしく求めながらも、「コミュニケーションを断ち切ろうとする冷酷な意志(同)」を持ち「他者との癒着を激しく拒絶する」という二律背反。「同じか、似たりよつたり」でありながら「俺の傷は俺自身だけのもの」という「唯一者である」ととの二律背反。「ものを書く」という(労働)が、否応なくその事実を告げる。にもかかわらず書く。この「書く」という行為が開示する唯一性を、過度にロマンチックな労働観と見なすべきではないだろう。だが、こうしたロマンチックな傾向が、シュティルナーに見出せるのも事実なのである。少

なくとも一九六九年の時点では、書くことで唯一者たろうとする思いが、シュティルナーとの接点として、中上にはあった。

しかし、シュティルナーの労働観のはらむ矛盾ともいいうべき揺らぎに沿うように、中上の労働観も移ろいを見せる。

手をぬいてだらだら仕事をやろうと思えばいくらでもできるわれわれを支えているのは、この形、この大きさの貨物はここにいれればすきまなくボリュウムがテンになるという職人としての感覚であり、倫理である。ぼくは羽田をやめてどこへ行ったらって、貨物をあつかって食っていきける自信はある。(略)

しかし、それはあまりにもおぞましい。ぼくは時どき、自分が植物のように、生きているにすぎないと思いはじめ、やみくもに凶暴な想像にとられることがある。地表におちた種子のように発芽し、根をのびし葉をひろげ、花を咲かせ実をつけて枯れる。それはほとんどぼくの単純な生きかたといっしょだ。ぼくにとって労働とは植物が表面から水と養分をすい、葉で光をうけるのといっしょである。(略)ぼくは単純な自分の生きざまに影響されて、不可能性の魔であることにも気づくのである。ぼくにはなにひとつない。希望など絶対がない。(略)

労働とは自分の単純な生の低いリズムにすぎないが、単純な自分の生こそおぞましい。なにかも植物の茎をむしりとり、足ですりつぶすようにすりつぶしてやりたい、そんな凶暴な想像にとらえられる。「働くことと書くこと」、

一九七三・五・三十一「東京新聞夕刊」、全集14、一八五
（一八七頁）

〈労働〉と「書くこと」とを主題としたこのエッセイが発表されたのは、「十九歳の地図」初出時と同じ一九七三年五月である。羽田空港での労働体験によつて獲得された、フオークリフトを自由自在に扱う〈労働〉は、「岬」の秋幸のように、道具との一体化による喜びや誇りであつてもよいはずなのに、「十九歳の地図」の「ぼく」による独白「ぼくに希望などない、絶対がない」とほぼ同じ言葉で、「ぼくにはなにひとつない。希望など絶対がない。」と書く中上がいる。「犯罪者永山則夫からの報告」から四年を経て、「書くという行為」が開示する唯一性など、もはや無邪気に信じることはできない。「労働」など「おぞまし」く、「足ですりつぶすようにすりつぶしてやりたい、そんな凶暴な想像」として、むしろ労働疎外論の不可能性が叫ばれている。

そもそも「十九歳の地図」には、労働疎外論の不可能性だけでなく、詩的言語（＝「歌のような文句」）の、および言語そのものの不可能性も繰り返し書かれていたのであった。

前述したように、「ぼく」の記号と言葉の世界が決定的に瓦解するのは、電話を通して、「かさぶただらけのマリアさま」の〈狂気〉に触れたことによる。

「ああゆるしてよお、ゆるしてほしいのお」ぼくはその声をきき、なにかが計算ちがいで失敗したと思った。「ゆ

るしてえくれえないのよお、死ねないのよお」女がなおも細いうめくような泣き声で言い、ぼくはその言葉にははななくて声に腹を立て、「嘘をつけ」と吠えつくようになった。「嘘をつけ」たしかに確実にぼくは嘘だと思った。そう思わないととりかえしのつかないことをしてしまったようであるがまんらなくなくなってしまうと思つた。(全集1、四一―頁)

それに対して「ぼく」は、「その言葉」が「嘘だ」と「思わない」とりかえしのつかないことをしてしまったようであるがまんらなくなくなってしまうと思」い、その言葉Ⅱ〈狂気〉を直視することができず、ついには、

不意に、ぼくの体の中心部にあつた固く結晶したなにかがとけてしまったように、眼の奥からさらさらしたあたたかい涙がながれだした。ぼくはとめどなく流れだすぬくもつた涙に恍惚となりながら、立っていた。なんどもなんども死んだあけど生きてるのよお、声ががらんとした体の中でひびきあつているのを感じた。眼からあふれている涙が、体の中いっぱいにたまればよいと思ひながら、電話ボックスのそばの歩道で、ぼくは白痴の新聞配達になつてたまたま立つて、声を出さずに泣いているのだつた。(全集1、

四一四頁)

という結末を迎える。「がらん」と化した「ぼく」の「体の中」とは、すなわち「ぼく」の〈無〉であり、そこではただ

〈狂気〉としての他者の言葉が「ひびきあつている」。しかし、「ただ立つて」いる「白痴の新聞配達」の姿こそが「唯一者」にふさわしいのだとしたら——「白痴」であればもはや「新聞配達」として役に立たず、「新聞配達」ですらなくなるだろう——、これは何と殺伐とした光景であろう。〈狂気〉に触れ、失語症の手前で、辛うじて〈無〉としての「唯一性」が開示されるのであるから。

「ぼく」に繰り返される溶解の感覚は、またしても「ぼく」を襲い、「ぼくの体の中心部にあつた固く結晶したなにかがとけてしまったよう」に涙を流す。「眼からあふれている涙が、体の中いっぱいにたまればよいと思」うが、一度外部にあふれたものが、内部にたまるのは、不可能なはずである。「固く結晶したなにか」とは、中上自身でいえば、その内部に巢食う、書くことのロマンチズムであり、書くという行為の労働疎外論であり、端的に言葉の世界であろう。「十九歳の地図」とは、それがすべて喪失される(Ⅱ「流れだす」という意味での〈切断〉)に他ならず、だからこそ、被差別部落や紀州という特殊性ではなく、ただ自身であることのうちで唯一性をとらえることの出發点となり、「岬」以後の展開をもたらしたと結論付けるのは、あまりにも予定調和的であろうか。

注

(1) 神谷忠孝は、「岬」の描写がそれ以前と異なり、「秋幸が風景と一体感をおぼえるとき、作者は意識的に樹木、そして草光を配するという描写」になつている指摘し、「枯木灘」につ

いても「自然を肉体の中にとりこみ、あるいはおのれの肉体を自然に溶けこませようとする」描写であるとして、自然との一体化を強調している（『文体と描写の特質』1985、3、「国文学」）。日高昭二も、「枯木灘」の「秋幸という存在は『風景』の中にいたと言ふことができ」、「おのれの手をシヤベルのように使つては、土方としての一日を風景の中で生きていた」という。また、秋幸の「透明に、単純になりたいという願い」には、『血』の浄化が祈念されている」とも指摘する（『『枯木灘』から『地の果て 至上の時』へ」、一九九一・十二、「国文学」）。

(2) 柴田勝二『中上健次と村上春樹 〈脱六〇年代〉 的世界のゆくえ』、2009、3、東京外国語大学出版社

(3) 柴田勝二は、「枯木灘」における「主人公と副主人公的人物との対照によって」、「想像界」から〈象徴界〉への移行が前景化されているという（前掲同書）。だが、永山則夫に仮託した言葉と意識の構造から見ても、「十九歳の地図」こそ、〈想像界〉から暴力的に放逐され、記号の世界の住人として自己を定位しようとしながらも、反復回帰する〈現実界〉によって、その世界が決定的に失調してしまう「ぼく」の悲劇として読むべきではないだろうか。

(4) 廣松渉『ヘーゲルそしてマルクス』、1991、10、青土社、一三一頁

(5) その違いは、柄谷の場合、『トランス・クリティーク』に到って明確に言明されている。柄谷は、マルクスの「転回は一度きりのもではない」とし、アルチュセールもまた、「認識論的切斷」は必ずしも一回限りであると言ったつもりはないが、

そのように読まれても仕方がない傾向があったことを後に認めたと注記している（『定本柄谷行人集第3巻 トランス・クリティーク——カントとマルクス——』、四七九頁、岩波書店）。

(6) 『ドイツ・イデオロギー』のテクストは諸本あり、その書誌的な問題を無視できないが、本稿では『マルクスその可能性の中心』で用いられている——明示されてはいないが——古由重訳旧岩波文庫版を参照、引用する。あわせて廣松渉編訳『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』、二〇〇二・一〇、岩波文庫版の頁数を併記する。

(7) 廣松渉『ヘーゲルそしてマルクス』、一二二頁

(8) 住吉雅美『嗤笑するエゴイスト マックス・シュティルナーの近代合理主義批判』、一九九七・五、風行社

(9) 『トランス・クリティーク』、二六三頁

(10) 『トランス・クリティーク』、二六一頁

(11) マックス・シュティルナー著片岡啓治訳『唯一者とその所有』、翻訳上巻一九六七・七、下巻一九六八・五、現代思潮社

(12) この点に関して柄谷は、「シュティルナーは、唯一者の例としてラファエロのような芸術家の名をあげたために、誤解を与えている」と注記し、シュティルナーは「個物のみが実在で類は觀念に過ぎないという唯名論的な発想」そのものを批判しているのであつて、同様に「われわれは個体性——一般性とは別の、単独性——普遍性（社会性）という軸に轉換」すべきと言っている（『トランス・クリティーク』、四八四頁）。ただ、『マルクスその可能性の中心』を書き上げた時期に柄谷／中上がそのような認識を持っていたと即断するわけにはいかない。